

# 御 講 聞 書

弘安三年五月二十八日 五九歳

弘安元年<sup>戊寅</sup>三月十九日より連々の御講、同三年五月二十八日至る、仍<sup>よ</sup>って之を記し畢<sup>おわ</sup>  
んぬ。 日向之を記す

<sup>およ</sup>凡そ法華經と申すは一切衆生皆成仏道の要法なり。されば大覺世尊は「説時未だ至ら  
ざる故なり」と説かせ給ひて、説くべき時節を待たせ給ひき。例せば郭公<sup>かっこう</sup>の春を送り、  
鷄鳥<sup>けいちよう</sup>の曉<sup>あかつき</sup>を待ちて鳴くが如くなり。此即ち時を待つ故なり。されば涅槃經に云はく  
「時を知るを以ての故に大法師<sup>ほっし</sup>と名づく」と説かれたり。今末法は南無妙法蓮華經の七  
字を弘めて利生<sup>りしょうとくやく</sup>得益有るべき時なり。されば此の題目には余事を交へば僻事<sup>ひがごと</sup>なるべし。  
此の妙法の大曼荼羅を身に持ち<sup>たも</sup>心に念じ口に唱へ奉るべき時なり。之に依って一部八卷  
の頂上に南無妙法蓮華經序品第一と題したり云云。